

唐長安城大明宮太液池の 共同発掘調査

調査経緯

当研究所は、中国社会科学院考古研究所との共同研究を1991年度に開始し、日中の都城の比較研究を進めてきている。1994年度から北魏洛陽城永寧寺、1996年度から5年間は漢長安城桂宮の共同調査を行った。そして、2001年度に新たに5ヵ年の計画で、唐長安城大明宮太液池の共同調査を開始した。

唐長安城大明宮は唐（618～907年）の都である長安城の宮殿であった（図1）。634年に造営が始まり、後に唐の政治の中心となった場所である。その位置は唐代長安城の東北、現在の中国陝西省西安市に残る明代の城壁の北方である。これまでに宮内では、重要な宮殿であった含元殿、麟德殿や、清思殿、三清殿、翰林院の他、城壁の門などの遺跡が発掘されている。大明宮の南半部は政務区、北半部は居住区であり、北半部の中央に太液池があった。太液池は「蓮葉池」とも呼ばれていた。太液池については『旧唐書』などに記述がある。これらによれば、池内には中島や亭があり、池の周囲には400間の回廊がめぐっていた。現在は、大部分が畑になり一部には

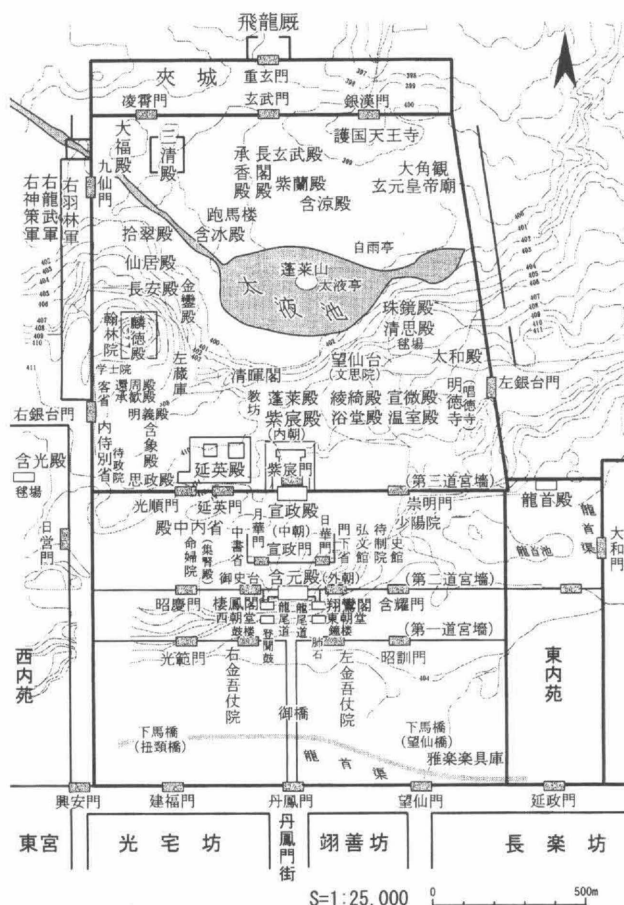


図1 唐長安城大明宮（妹尾達彦『長安の都市計画』2001に加筆）

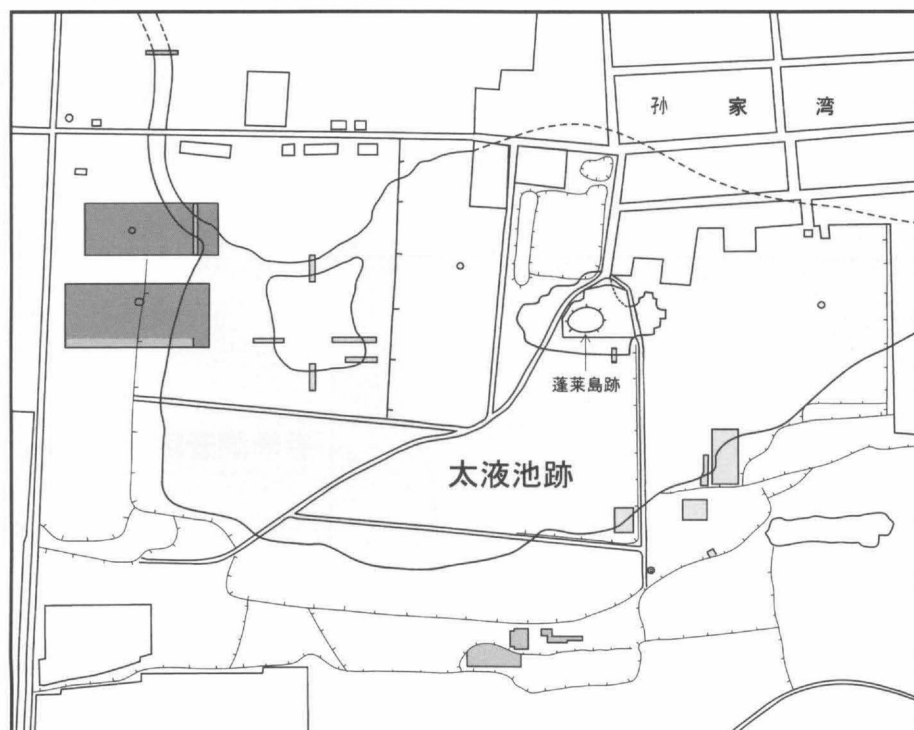
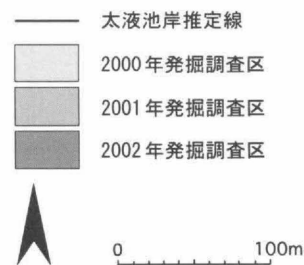


図2 唐長安城大明宮太液池発掘調査区位置図 1:5,000

太液池の関連史料	
漢長安城の泰液池	
『史記』卷十二 孝武本紀 太初元年 (B.C.104)	
作建章宮…其北治大池、漸臺高二 十丈、名曰泰液池、中有蓬萊、方 丈、瀛洲、壺梁、象海中神山龜魚之屬。	
唐長安城の太液池	
『旧唐書』卷十五 憲宗本紀下 元和十二 (817) 年五月己酉、作蓬 萊池周廊四百間。	
『旧唐書』卷十七上 文宗本紀上 大和二 (828) 年五月庚子、命画工 圖於太液亭、朝夕觀覽焉。	
清 徐松『唐兩京城坊考』卷一 紫宸之後曰蓬萊殿、西清暉閣、其北 太液池、池有亭。	



民家等が建っていて、かつて池があったことは想像し難い（巻頭図版2）。ただし、蓬莱島の跡といわれる版築の高まりが8m前後残存し、池の南方にあたる部分は高くなっている。

中国社会科学院では西安研究室唐城隊が太液池の調査を行っており、最初の調査は1957年に始められた（『唐長安大明宮』中国科学院考古研究所 1959）。その後1998年に広域で約3万ヶ所をボーリング調査し、池の汀線を推定した。2000年からはこの成果を用いて継続して発掘調査を進めており、これまでに池の南岸と南方、北西の水路、中島などを調査した（図2）。このうち、2002年春までの調査については、2002年8月の当研究所創立50周年記念国際講演会『東アジアの古代都城』において、何歳利氏により概要が報告された。

1998年以降の調査にあたっているのは、安家瑞、龔国

強、李春林、何歳利の各氏である。今年度当研究所からは、4月に中村一郎、中島義晴、馬場基、神野恵が、11月に内田和伸、今井晃樹、中村、中島が調査に参加した。

今年度調査の概要

今年度春の調査区（図4）は池の西岸部分にあたる。東西約95m、南北約47mの長方形で、面積は約4400㎡である。一部に2001年秋のトレンチを含む。今年度秋の調査区は池の北西部、導水路の部分であり、春の調査区から北へ約20mの位置にある。東西約90m、南北約40mの長方形であり、面積は約3600㎡。一部に2001年春のトレンチを含む。基本層序は、耕作土（表土）、1950年代の攪乱層、太液池廃絶後の堆積土、唐代の遺構面の順である。遺構面は大部分が現地地表下数十cm～1.5mにある。主な検出遺構は池、道路、建物、塀状遺構、水路、井戸、貯水池である。

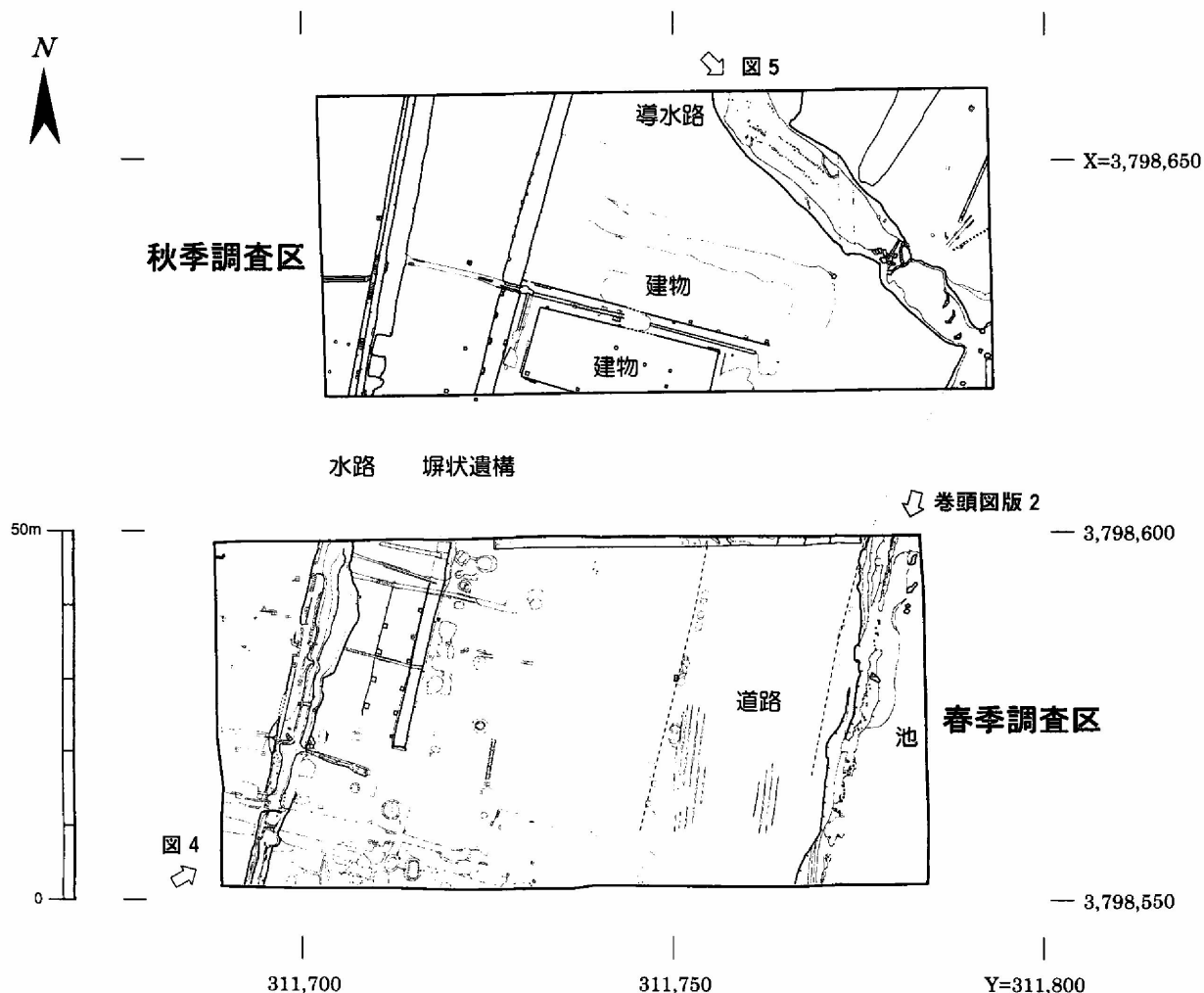


図3 2002年春・秋季太液池発掘調査遺構平面図 1:1,000

主な検出遺構と出土遺物

太液池（巻頭図版2） 両調査区東端で太液池の西岸北半部を計約60m検出した。池の深さは2m以上。池岸の陸地側では地盤を強化するために地山に多くの木杭を打ち込んだ跡がのこり、その上部は版築で固められている。岸際の池底には径10～20cmほどの穴が10～50cmほどの間隔で並ぶ。これは護岸施設の木杭列跡と考えられる。岸の傾斜部では石は検出されなかったが、池底では最長部で1.5～2mほどの石が3点出土した。これらは落ち込んだ護岸石の可能性がある。池の廃絶時期は遺物の出土状況から唐の滅亡から間もない頃と考えられる。

太液池への導水路（図5） 秋の調査区東半で45m以上検出した。幅3～8m。西北部に2条の並行する小穴列があり、池入水部近くには磚積の施設が複数残存する。

道路 両調査区東部で計約40m以上検出した。幅は約20m。路面には轍と思われる溝がのこる。

建物 秋の調査区中央南半で複数の建物を検出した。一辺約50cmの正方形の礎石、磚積の基壇外装、磚敷の雨落溝の一部がのこる。軸線は北で東に振れている。

塀状遺構 両調査区西半で幅約1.6m、残高数十cmの版築の高まりとそれに沿う2条の礎石列を計約70m検出した。この遺構は直線的に走るが、方位は建物と同様に北で東に振れている。塀または回廊とも考えられる。

水路 両調査区西端で計約90m検出した。幅は約1～4m。部分的に磚積の護岸や小穴列がのこり、数時期に分かれる。方向は塀状遺構とほぼ並行し、東西から複数の溝が流れ込む。これらの溝は幅1m以下であり、磚を用いて構築されている。

その他の遺構 春の調査区の西半で、磚積の井戸や貯水池を複数検出した。

出土遺物 唐代の瓦と磚が多量に出土した。その他、三彩、白磁、銅製品などがある。

結 び

今年度の調査によって、太液池の西部と北西部の様相が明らかになってきた。この部分には、池への導水路があり、建物や井戸、池岸に沿う道路、磚積の水路などがつくられ、この周辺が大いに利用されていたことが窺える。また、池岸の築き方が判明し、時期差が認められた。



図4 春季調査区全景（南西から）



図5 太液池の導水路（埋土上層掘下げ状況、北西から）

しかし、建物の具体的な性格や池岸の意匠などについては、今後の検討を要する。

今年度の調査では、日本側はトータルステーションによる測量と遺構図の作成（1980西安座標系による）、4×5判と6×6判カメラによる遺構写真撮影を行った。また、本格的な共同発掘調査を始めるにあたり、過去の調査の遺構、遺物の実測図、写真及び出土遺物の観察に基づき、今後の共同調査の具体的な進め方を協議した。

残り3年の共同調査によって、太液池と周辺部の実態のさらなる解明を期待できる。（中島義晴・今井晃樹）